

立命館史学会 第78回例会報告 報告要旨

立命館大学 文学研究科 ヨーロッパ・イスラーム史専修 修士1年 出島流駆

「国民形成における象徴と境界 — マージナル概念による再検討を通じて —」

本報告は、社会学におけるマージナル概念を理論的視座として導入し、帝政ドイツ期における国民形成を、統合と排除の複合的相互作用として再検討するものである。従来の国民形成史は、中央から周縁へと同質化が進む一方向的過程として叙述されてきたが、ドイツ帝国(1871–1914)は南北の宗派的亀裂、階級的対立、さらに文化(Kultur)と文明(Zivilisation)の価値的葛藤といった多層的分裂を内包し、単一的な統合モデルでは捉えきれない複雑な社会構造を呈していた。このような実態に対して、ロバート・E・パークのマージナル・マン論およびミルトン・M・ゴールドバーグのマージナル・カルチャー論に依拠し、帝国を複数の文化軸が交錯する「マージナルな空間」として捉えることで、国民形成を固定的な中心による形成ではなく、周縁的集団間の緊張と媒介を通じて新たな象徴秩序が創出される複合的かつ流動的な過程として描き出す。その上で、こうした理論的視点をもとに、第一次世界大戦前夜のドイツ帝国で生じた「8月体験」を、国民形成の象徴であると同時に、マージナルな力学が結晶した歴史的現象として説明を試みるものである。